

御足冷ク御肝消テ渡リガチサセ給ヒタレバ、橋ノ半ニ立迷テオハスルヲ、誰トハ不知如何様此邊ニ臂ヲ張リ、作リ眼スル者ニテゾアル覽ト覺エタル武士七八人、跡ヨリ來リケルガ、法皇ノ橋ノ上ニ立セ給ヒタルヲ見テ、此ナル僧ノ臆病氣ナル見度モナサヨ、是程急ギ道ノ一つ橋ヲ渡ラバトク渡レカシ、サナクバ後ニ渡レカシトテ押ノケ進ラセケル程ニ、法皇橋ノ上ヨリ被押落サセ給ヒテ、水ニ沈マセ給ヒニケリ、

〔一話一言五〕立圃驛路全書

又の日〇慶安五年のあした、霜亥ろく露もこぼる、ばかりに見へていとさむし。略懸河のはしへ土橋と見へしが、よく見渡せば、柴をつがねあげてつちをあつくおほへり、

かけ河やはしへゑる柴栗ばしら

〔菅笠日記上〕くだりはてたる所の里を樋口といひ、そのむかひの山本なる里は宮瀧にて、よしの川は此ふた里のあひだをなん流れたる。略申此わたり、川のさま、さるいはほの間にせまりて水はいと深かれど、のどやかにながれて早瀧にはあらず、さて岩より岩へわたせる橋、三丈ばかりもあらんか、宮瀧の柴橋といひて、柴してあみたる、渡ればゆるぎて、ならはぬこ、ちにはあやふし、

〔倭名類聚抄十道路具〕土橋 唐韻云、圮ヒ音惜、和名豆知波之、土橋也、
〔字鏡集四〕圮ヒ同
〔同〕土橋同 ツチバシ

〔永正記下〕

一宮中穢物之時可成思慮事

御池土橋道穢物不及本宮、乍立見付人、即退出不爲穢也云々、橋穢物不及本宮、土橋同也云々、
〔東海道名所記四〕町屋 まらや橋 小橋 大橋、長さ百六十間。土ば